

3M: $-2.5 \pm 7.2\%$ (CR群) vs. $7.5 \pm 4.3\%$ (C群))。

【考察】 虚血性疾患患者においては、骨格筋における酸素供給能に比して酸素利用能が低下しており、CPX 中の大腿部における SmO_2 の推移が異なる可能性が示唆された。

P3-59.

地域在住高齢者における社会参加と座業時間の関連

(専攻生・公衆衛生学)

○菊池 宏幸

(公衆衛生学)

井上 茂、小田切優子、高宮 朋子

大谷由美子、下光 輝一

【背景と目的】 地域に在住する高齢者において社会参加の推進は、身体活動量を維持向上させ、閉じこもりや認知症予防に重要である。そのため、国の健康づくり施策である健康日本 21 においても目標設定項目の一つとなっている。一方、近年、座業時間が身体活動量とは独立して、生活習慣病、社会的孤立、うつ病等と関連していることが指摘されている。しかし、社会参加と座業時間との関連を検討した研究は少ない。そこで、本研究では、地域在住高齢者を対象に社会参加と座業時間との関連を検討する。

【方法】 国内 3 自治体（東京都文京区、東京都府中市、静岡県小山町）に居住する 65~74 歳の高齢者 2,700 名を住民基本台帳から無作為に抽出し、質問紙を郵送し、2,045 名から回答を得た（有効回答率 75.7%）。本分析では、回答者のうち定職に就く者を除く 1,589 名を対象とした。座業時間に関してテレビやコンピュータ等の 5 項目の頻度と時間を、さらに社会参加に関しては老人クラブや地域の行事等への参加等の 6 項目について質問した。座業時間は中央値で 2 値化して目的変数とし、社会参加およびその他の個人背景を説明変数とした多重ロジスティック回帰分析を行った。

【結果】 対象者の一日あたりの座業時間は、中央値（25% 値、75% 値）は 4.9 時間（3.0 時間、7.3 時間）であった。座業時間が長群となる要因としては、BMI25 以上（オッズ比 (OR) ; 1.64、95% 信頼区間 (CI) ; 1.27-2.15）、社会参加が低い (OR ; 1.48、95%CI ; 1.20-1.83) の 2 項目が有意だった。性、年齢、

教育歴、居住地は、座業時間と有意な関連は認められなかった。

【結論】 現役を退いた高齢者において、社会参加の低さと座業時間は、個人的背景要因を調整しても強く関連していた。高齢者の社会参加促進が重要な施策となっているが、本研究は座業時間延長を予防するという観点から、この政策を支持する結果となり、今後も高齢者の社会参加を推進していく必要性が高いことが示唆された。

P3-60.

職域における肥満と生活習慣の関連についての検討

(専攻生・公衆衛生学)

○北林 蒔子

(公衆衛生学)

大谷由美子、高宮 朋子、小田切優子

井上 茂、石橋 弘子、下光 輝一

【目的】 肥満に関連する生活習慣要因を明らかにすること。

【方法】 平成 21 年に某地方自治体職員 3,300 名に自記式質問票による調査を依頼し、2,800 名から回答を得（同意書回収率 84.8%）、このうち、他職種と勤務形態が大きく異なる消防吏員 509 名除いた 2,291 名を解析の対象とした。自記式生活習慣等質問票を用いて調査を行った。従属変数を肥満の有無 (BMI25 以上で肥満有)、独立変数を生活習慣要因 (朝食欠食、昼食欠食、夕食欠食、朝食、昼食、夕食を満腹まで食べる、間食、食べる速さ、運動習慣、歩行時間、TV/DVD 等視聴時間、飲酒、喫煙)、調整変数を年齢とした男女別の多重ロジスティック回帰分析により、BMI25 未満をリファレンスとした場合の生活習慣要因それぞれについて調整オッズ比 (adOR) を求めた。

【結果】 男性では昼食欠食 (adOR ; 1.61, 95%CI ; 1.04-2.49)、夕食を満腹まで食べる 1.32 (1.02-1.71)、間食する 1.80 (1.40-2.32)、速く食べる 1.86 (1.44-2.39)、歩行時間 1 日 60 分未満 1.70 (1.19-2.43)、飲酒習慣あり 0.74 (0.58-0.96)、女性では昼食欠食 1.98 (1.01-3.86)、夕食を満腹まで食べる 1.65 (1.14-2.36)、速く食べる 1.81 (1.29-2.55)、長い TV/DVD 等視聴時間 1.66 (1.16-2.37)、飲酒習慣あり 0.50